世界市民教育プロジェクト　多文化教育部門

未来を築く多文化教育
-共生する社会のために-

教授　エマニュエル・マナロ
准教授　奥村 好美
講師　パク・ジュナ
講師　ブラザーフッド・トーマス
D2　田野　茜
D2　ウッドマン・カタリナ

1．多文化教育とは

- 背景

　多文化は日常生活で頻繁に経験され、日本社会においても重要な要素となっている。この多文化的な現実を反映した教育は、ますます重要になってきている。多文化教育とは、多様性を称え、公平性を促進し、様々な集団の歴史、文化、視点をカリキュラムや学校環境に統合することで、生徒が多様な世界で生き抜く力を養う教育アプローチおよび理念です。多文化社会における個人とその生活に焦点を当てる。

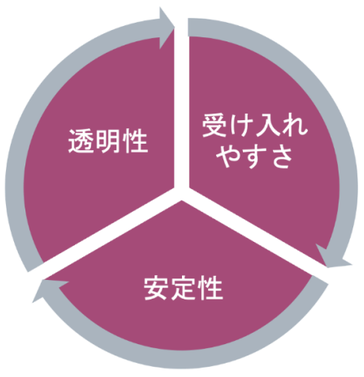
- 目的
  - 多文化社会における個人とその生活に焦点を当てる。
  - 教育研究と実践を多角的に捉え、包括的な議論を展開する。
- 主なテーマ
  - 多文化化によるメリットと課題の両面を検討。
  - 異なる民族・文化背景を持つ人々が共に生きる社会や教育現場での実践や学びを探求。
  - 多文化共生に関する意識・実践・学びの形成過程を解明する。
- 目指すもの
  - 多文化社会における人々の健全な適応とウェルビーイングの実現を支援。
  - 統合的で持続可能な社会発展に貢献する道筋を明らかにする。
  - 教育の役割を考察し、包摂的で持続可能な共生社会に向けた視点を提供する。

2．活動報告

A.公開講座

第1回 2025年2月14日（金）
● より幸せな多文化社会のために
パク・ジュナ

多文化受容に必要なこととは？
- 多文化主義は「文化的多様性の価値」と「公平な参加・共有」を重視
- 安全感が多文化受容に重要な役割を果たす（Multiculturalism Hypothesis）
- 統合型適応は心理的・社会文化的適応（幸福感、言語能力、学業等）に最も良い影響を与える
- 対人接触も多文化理解を促進する（Contact Hypothesis）



● 多文化社会日本に向けての土台作り
ー国際高等教育「市場」の動揺がもたらす機会
ブラザーフッド・トーマス

異文化理解の場としての多文化共生キャンパス、留学生の受け入れ
- アングロフォン諸国（オーストラリア、カナダ、イギリス、アメリカ）では、移民・留学生政策の厳格化
  →年間で約25万人の留学生がこれらの国を選ばなくなる可能性
- 日本の政策環境は「受け入れやすさ・安定性・透明性」の面で他国より有利
  「もてなし」と多文化共生を重視するビジョンが重要
  →国際高等教育市場の変動は日本が多文化社会のモデルとして進むためのチャンス

● 多文化社会を担う力を育む実践とはートランジッション研究に学ぶー
工藤 和宏ー獨協大学

第2回 2025年4月25日（金）
● 多様な学習者の包摂を目指す個別化・個性化教育の検討
ー日本語教育を視野に入れて
奥村 好美、田野 茜

- 個別化・個性化教育
  - 個別化：主に量的個人差を尊重する考え方
  - 個性化：主に質的個人差を尊重する考え方
- 個別化・個性化教育を考えるポイント
  - 「一斉画一授業」対「学習者主語」なのか
  - 何を個に応じるべきか
  - 個別化・個性化と協働性の関係
- カリキュラム全体での個別化・個性化（加藤、安藤、1985他）
  - 加藤幸次による個別化・個性化教育の指導モデル
  - 愛知県東浦町立緒川小学校及び愛知県東浦町立石浜西小学校の事例
- 教科における個性化教育―「逆向き設計」論において「個に応じること」（西岡、2016他）（例）パフォーマンス課題で個に応じる
  - 興味・関心 複数のテーマ・立場から選択、自分の好きなものを選べる
  - 表現 筆記や視覚、口頭等表現の選択肢を増やす
  →「理解」を評価する「鍵となる規準」は共通である必要性

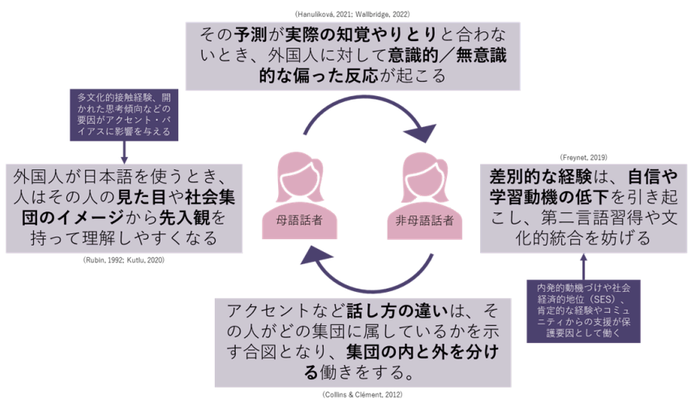
● 移民の子どもたちの教育機会とウェルビーイング保障を考える
額賀 美紗子ー東京大学

B.研究報告

● ホリスティックな多言語主義の視点から日本語第二言語使用
エマニュエル・マナロ、ウッドマン・カタリナ

背景
多文化の場でのコミュニケーションを理解するには、言語知識だけでなく人との関わり方の理解も欠かせない。その一因としてサプライズ理論があり、人は会話で次に出る言葉を予測し、その予測は話者の外見や社会的アイデンティティに左右される（Wilcox, 2023; Wallbridge, 2022）。この文脈で「日本人らしさ」は社会的アイデンティティの一つとして形づくられ、そこから外れる人は「外国人」と見なされやすい（Yamashiro, 2013）。本研究は、こうした仕組みを明らかにすることで、学習者が社会的な場を乗り越えやすくし、安心して話せる環境づくりを目指している。

結果
- 白人話者は強いサプライザル反応を示したが、民族的背景によって結果は異なり、外国人は一様に捉えられていない。
- 外見が曖昧な話者は理解に時間がかかり、日本人話者より処理コストが高かった。
- こうした差は、日本語教育や社会統合において移民に不平等な負担を課す要因となる。



参考文献

Bosio, E. (2021). Conversations on Global Citizenship Education: Perspectives on Research, Teaching, and Learning in Higher Education. Routledge
日本国際理解教育学会. (2020). 国際理解教育を問い直すー現代的かダイオへの１５のアプローチ. 明石書店
松尾 知明. (2023). 日本型多文化教育とは何かー「日本人性」を問い直す学のデザイン. 明石書店
宮島 喬一. (2014). 外国人の子供の教育ー就学の現状と教育を受ける権利. 東京大学出版会
西山 教行、大木 充. (2019). グローバル化の中の異文化館教育ー異文化間能力の考察と文脈化の試み. 明石書店
加藤幸次、安藤慧.(1985).個別化・個性化教育の理論. 黎明書房
西岡加名恵.（2016）.教科と総合学習のカリキュラム設計. 図書文化社
Wallbridge, S., Bell, P., & Lai, C. (2022). Investigating perception of spoken dialogue acceptability through surprisal. Proceedings of the Interspeech 2022 Conference, 3523–3527. ISCA
Wilcox, E. G., Pimentel, T., Meister, C., Cotterell, R., & Levy, R. P. (2023). Testing the predictions of surprisal theory in 11 languages. Transactions of the Association for Computational Linguistics, 11, 1451–1470. Association for Computational Linguistics
Yamashiro, J. H. (2013). The social construction of race and minorities in Japan. Sociology Compass, 7(2), 147–161. Blackwell Publishing

WEBサイトはこちら